

四角のなかに 押し込めること

小宮山博史

築地活版の仮名書体

「彼は中くらいの背丈で、華奢な体躯であり、髯は少なくはなはだ声は快調で、極度に戦を好み、軍事的修練にいそしみ、名誉心に富み、正義において厳格であった。彼は自らに加えられた侮辱に対しては懲罰せずにはおかなかった。幾つかのことでは人情味と慈愛を示した。彼の睡眠時間は短く早朝に起床した」「酒を飲まず、食を節し、人の取扱いにはきわめて率直で、自らの見解に尊大であった」「彼は自邸においてきわめて清潔であり、自己のあらゆることをすこぶる丹念に仕上げ、対談の際、遷延することや、だらだらした前置きを嫌い、ごく卑賤の家来とも親しく話をした」「彼は少しく憂鬱な面影を有し、困難な企てに着手するに当たってははなはだ大胆不敵で、万事において人々は彼の言葉に服従した」。引用が長くなりましたがこの「彼」っていったい誰でしょうか。もっともこれだけではわかりませんよね。正解は織田信長です。この大胆・細心・禁欲的そして合理的な

信長の人物像を書き残したのは、ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスです。フロイスは一五六三（永禄六）年来日し、三〇余年を日本で過ごし一五九六（慶長二）年長崎で没しました。晩年の十数年を『日本史』の執筆に費やしましたが、この文章はその中の第一部八三章の冒頭に書かれています（中公文庫『完訳フロイス日本史²』）。

（松田毅一・川崎桃太訳、二〇〇〇年）。

このルイス・フロイスの名前を冠した道が長崎にあります。

長崎県庁の前からほぼ北へまっすぐ走るのが国道三四号線。その一本東側で、三四号線と平行する道が「フロイス通り」です。フロイス通りは県庁前万才町五丁目の長崎グランドホテル前から始まり、万才町と興善町の間を抜けていきます。長崎グランドホテルの玄関脇には「本木昌造宅跡」の碑が建っています。元阿蘭陀通詞で日本の近代活版術の創製者である本木昌造の旧宅は、大村市に移築されて住居として使われていましたが、私が平成五年に訪ねたときにはすでに廃屋で長崎への再移築も不可能な状態でした。こののち旧宅は取り壊されて現存しませんが、三〇分の一の模型が長崎市歴史民族資料館に展示されていますので、長崎を訪ねた時にぜひご覧ください（上銭座町三十一、市電茂里町下車）。

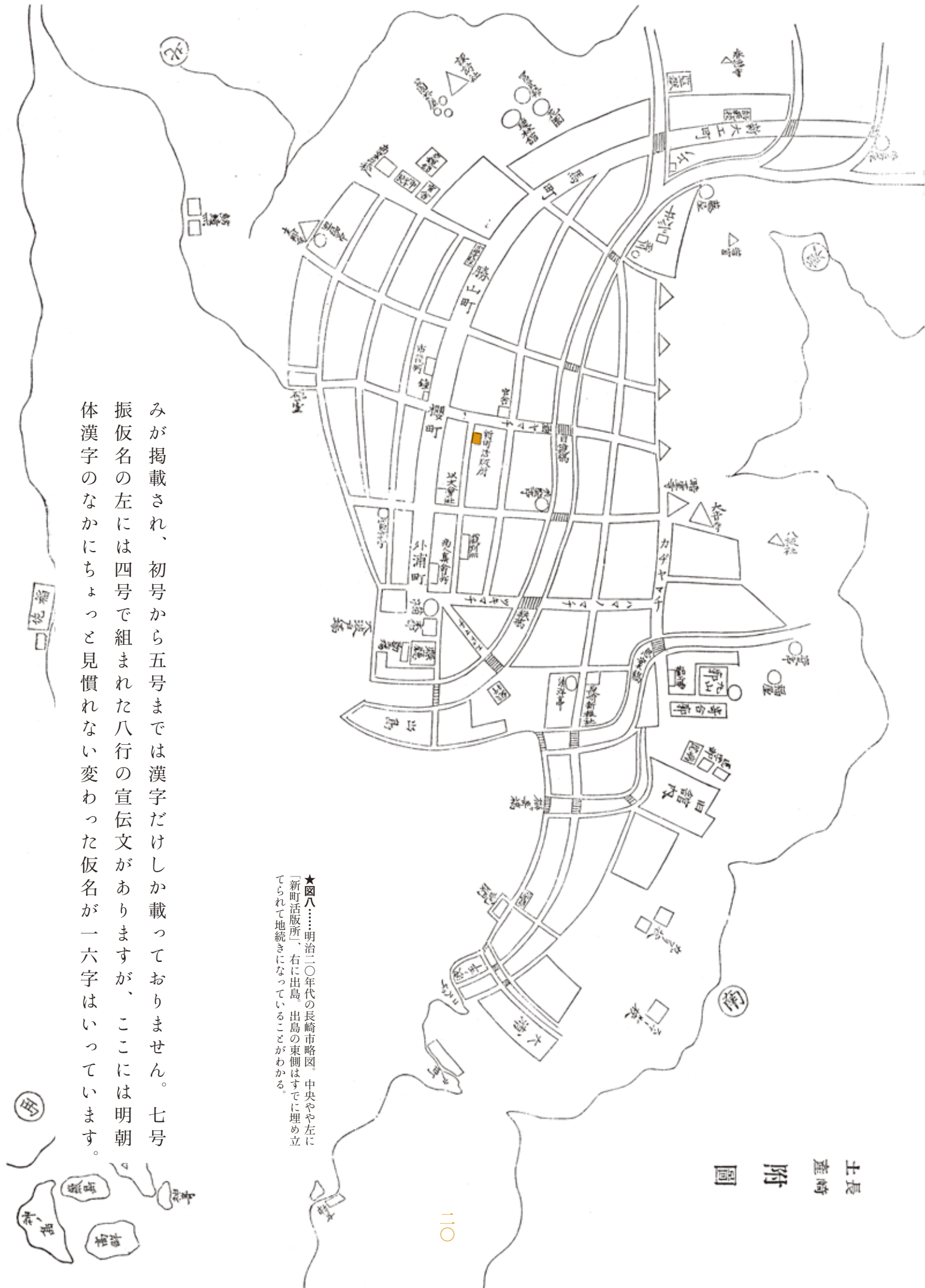
旧宅跡の碑から約三〇〇メートル北へ歩くと興善町六丁目の角に自治会館があり、道を隔てた左側は興善町三丁目の長崎消防局です。自治会館の角に「近代活版印刷発祥之地 新街活版所跡^{★図八}」という碑が建っています。

ここが本木昌造が作った新街私塾であり新街活版所^{☆註一}の跡で、「上海から明朝体活字がやってきた」に掲載した図七の「崎陽新塾製造活字目録」を印刷した印刷所です。この活字見本には仮名の見本として「七号振仮名」の

☆註一……新街活版所・他 本木昌造が設立した「新街活版所」は後に東京に進出し株式会社東京築地活版製造所となり、日本の明朝体活字の改刻・洗練を担ったが、営業不振をもって昭和一二（一九三八）年清算。本木昌造の事績調査に生涯をかけた三谷幸吉は自著『本木昌造平野富二詳伝』（昭和八年、詳伝頒布刊行会）のなかで、社名の変遷を次のように記録している。長崎新塾出張活版製造所、平野活版所、築地活版所、築地活版製造所、有限責任東京築地活版製造所、株式会社東京築地活版製造所

★圖八……明治二〇年代の長崎市略図。中央やや左に「新町活版所」、右に出島。出島の東側はすでに埋め立てられて地続きになっていることがわかる。

みが掲載され、初号から五号までは漢字だけしか載っておりません。七号振仮名の左には四号で組まれた八行の宣伝文がありますが、ここには明朝体漢字のなかにちよっと見慣れない変わった仮名が一六字はいつています。



☆註二……変体仮名『広辞林』では「普通の平がな」という字体のかな。漢字の草体から出て徹底した単純化に至る過程にある仮名」とある。現在見ているようなひらがなの字形になる前の段階の姿。JISの規格にはなくPCでは打ち出せない。

☆註三……ヘボン ヘボン、漢字では「平文」と書く。アメリカ長老教会宣教師で眼科医、本名は James Curtis Hepburn (1815-1911)。一八五九年来日、はじめ神奈川宿の成仏寺に住み、近くの宗興寺を施療所とし、後に横浜居留地に移る。岸田吟香を助手として『和英語林集成』を編集し、上海の美華書館で印刷。初版一、二〇〇部という。版權を二、〇〇〇ドルで丸善に譲り、その金額を明治学院に寄付しヘボン館が建てられる。初代明治学院大学総理。ヘボン式ローマ字の生みの親。一九一一年九月二一日午前五時ニューヨーク州イーストオレンジの自宅で死去。同日早朝ヘボン館は火災により炎に包まれた。

☆註四……岸田吟香 岸田吟香がヘボンと知り合ったのは元治元（一八六四）年四月であった。しつこい眼病に悩まされていた吟香は、治療のためヘボンの施療所を訪れ点眼の治療をうけたところ、七日ほどで全快。ヘボンの清らかな人格にうたれ辞書編纂の助手となった。上海から横浜に帰ってのち、ヘボンの許可を得て点眼薬「精錫水」を日本と上海で売り出した。

☆註五……字体・字形・書体 私は字体はその字がその通りに読める文字の骨組みと解釈している。書体は字体にある一定の意匠を施したもので、その結果明朝体・ゴシック体などが生まれる。字体は当用漢字字体表を見てわかるように細丸ゴシック体で表記されることほとんどである。すると書体も書体で表現するはかなさか。JIS X 0213:2000「情報交換用符号化拡張漢字集合」の定義では「字体 図形文字の図形表現としての形状についての抽象的概念」「字形 字体を、手書き、印字、画面表示などによって実際に図形として表現したもの」とする。字形は形そのものということだ。

「も（毛）」「の（乃）」「わ（和）」「へ（遍）」などはいわゆる変体仮名☆註二です。し、「ハゝ」はカタカナと繰り返し記号の組み合わせで「はば」と読みます。漢字は上海にあった美華書館所有の明朝体活字の複製であったことは前回書きました。では美華書館に仮名活字はあったのでしょうか。普通に考えればこの当時（明治維新前）（後ですが）の中国に早くから仮名活字があったとは思いいくのですが、五号漢字にあらうカタカナ活字が一種類だけありました。これは慶応三（一八六七）年に美華書館で印刷されたヘボンの『和英語林集成』☆註三を組むために岸田吟香が版下を書いたようです。その版下をもとに種字を彫り母型を作ったと思われますが、ひらがなは作っておりません。

日本文を綴るのにひらがなは不可欠です。ウィリアム・ギャンブルは本木昌造たちに活字製法の大略を教えました。が、極東の一小国の文字、ひらがなについて、自分が帯同してきた漢字活字に合う字形はごういうものがよいかというアイディアや見識を持って来日したとは考えにくい。しせん本木たち日本人が独力で字形を模索し具体化することが求められたはずです。美華書館から輸入した漢字活字の文字面は正方形です。この漢字活字に合わせる仮名活字も当然正方形にならざるを得ません。漢字活字を眺める本木たちにとって、いままでひらがなを正方形の中に一字づつ書くという発想も経験もなかったでしょう。ひらがなは常に連続して書かれる連綿体であり、組み合わせる文字、運筆の速度によって字形は変化しどれひとつとして同じものはないのです。

手書き文字が一字種多字形☆註五★図九であるのにたいして活字は基本的には一字種一字形です。本木たちはひらがなの字形をどうするか大いに悩んだのでは

(安)あ

国文資料編(古代・中世)

あ

安 阿 悪 愛

あ ⁵⁵	あ ²⁶	あ ¹³	あ ^{7-b}	【安】
あ ⁵⁵	あ ²⁸	あ ¹³	あ ^{7-b}	あ ⁵
あ ⁵⁵	あ ²⁹	あ ¹⁴	あ ^{7-b}	あ ^{7-a}
あ ⁵⁷	あ ²⁹	あ ¹⁵	あ ^{7-c}	あ ^{7-a}
あ ⁵⁷	あ ³¹	あ ¹⁶	あ ^{7-c}	あ ^{7-a}
あ ⁷⁰	あ ³¹	あ ¹⁹	あ ^{7-c}	あ ^{7-a}
あ ⁷⁵	あ ³⁴	あ ¹⁹	あ ^{7-c}	あ ^{7-a}
あ ⁷⁷	あ ³⁴	あ ²⁴	あ ⁸	あ ^{7-a}
あ ⁷⁸	あ ⁴⁰	あ ²⁴	あ ⁹	あ ^{7-b}
あ ⁹¹	あ ⁴⁸	あ ²⁴	あ ⁹	あ ^{7-b}
あ ¹³²	あ ⁵²	あ ²⁶	あ ¹⁰	あ ^{7-b}

★図九……たとえば「あ」を「かな大字典」(柏書房刊、一九七七年)で見ると、いかに豊かな字形が生み出されていたかがわかる。活字化とは単一化・固定化であるが、そのなかに手書きの息づかいをいかに盛り込むかに苦心する。

ないかと想像するのですが、いかがでしょう。あくまでも想像の域を出ないのですが、まず自分たちが普段書いているひらがな、あるいは身近の能筆家の書くひらがなを思い浮かべたと思います。ギャンブルから習った活字用種字の作り方に忠実に倣い、まず毛筆書きの文字を書いてそれを版下として木彫種字を彫ったはずです。ではその字形はどんなものであったのでしょうか。すこし年代が下りますが、明治二三（一八三〇）年に長崎の新町活版所から印刷刊行された『増補再版新々長崎美やげ』★図一〇をあげることができます。そこに使われている仮名活字は本木が自力で作ったものです。その版下を書いたのは本木昌造の友人池原香稚いけはるかあかだといわれています。活字研究者三谷幸吉は自著の中で「池原香稚氏は本木昌造先生の活字（平仮名）の種字を揮毫せられたひとである」と書いており、私も本木活字を収蔵する長崎諏訪神社「諏訪の杜文学館」で池原香稚の書簡を閲覧いたしました。が、たしかに字形は同じでした。この書体は「和様」とよばれていたと三谷幸吉は記しています。

『長崎ぶらぶら節』の主人公古賀十二郎は実在の人物ですが、古賀も「本木氏が、池原香稚（引用者註「稚」のかわりに「釋」と書く場合もある）に行体の漢字や平仮名など書かせ、之を活字に製造して用ゐてゐた事など決して遺却してはならぬ」と書いています。またこの『増補再版新々長崎美やげ』を印刷するときには本木昌造が苦心して作った活字をできるだけ使うこととし、そのために活版所の人々に命じて初期の活字を揃えさせたとも書いています。

『増補改訂長崎美やげ』を組んでいる行書活字と「和様」仮名は最も初期の制作になるものなのです。図版を見ていただければわかると思います

禁門治三部全庫

初版序

伊橋定之助

此長崎土産。肥前の煙草天草の海膽と競争して、天晴れ販路を廣めんどの野心有て出せしよはあらず。事の元ひまで日のくらし方に困る様を見込まれ。長崎の事情を是非數枚書いて呉れ。國許へ見せて喜ばせ度からど。二三友人が懇ろの頼み、もだし難くて。氣任せゝ書なぐり。何時となく組立てたる、此書の骨にして。此地の話を遠方へする、其口上の一寸代理を務めた丈の事なるが。狭い土地丈に何時か此事を傳聞せる人のふねて。見ぬくせゝ褒め倒し。實に旨まい。足下の筆は一種の機軸がある。田舎は愚か、東京もめづらしいぞ。寶を深山に埋めるも惜しいもの。どふです此れを出版してはど。そろ／＼油をかけられて。始めの程は、ナノノ、一時のいたづらでど。濟まして居りしも。濟まぬハ吹き来る煽動風。中も宮代氏など云ふハ、殊更の扇持。骨さへ出來れば跡ハ易し。肉を附け、皮をかぶせて。刷て見給へ。所望の者がうるさい程有る。ナ、印刷一切は僕が

一

★図一〇……「増補再版新々長崎美やげ」明治二三年二月刊。著者鈴木力、印刷者境賢治、発売元新町活版所（長崎県長崎市新町四番戸）一一七頁。使用書体は初版序は五号明朝体、仮名は築地前期五号。再版序は三号行書（崎陽新塾活字製造目録）中の三種の三号見本の左端の書体。本文は四号明朝体、仮名は和様。最終頁の寄稿文は三号楷書と和様。四号和様仮名は明治四（一八七二）年刊行の「法普戦争誌覽」（渡六之助著）なごにすでに使われている。【二四〇二七頁】

再版序

四

繁昌を予歳ふ近ハ鶴の港。愛夜乳やさしくも。氣が長
崎の土地氣實に。丁度長者が家乃羅祭り。餘情をたつ
ぶり尋んだ離の、昔七分今三分。うるさき電鏡世界
の當世ふも、又と類かた今桃源。其仙樂の幾分と、一卷
の中、詰め込んで。度く衆生を利益せん、善乃方便の
長崎ふを器を。新々と名の附く丈ふ。何けて嬉れしよ、
玉の文字。見ぬに恥、取らぬを損と。人氣を忽ち病仙と

有頂天上。俄名聞の素天邊ふ推のほせ。桃花流るゝ、細
溪川の口ならで。瀬戸の入口を乳打越して。遠く上方
関東のそこより。豫約手後れの方ゝ、我れくくと
終だり来る者。日ふ幾人の數を知らず。本を本で、
西よ理束より。是非再版して、天下の為めを喝て呉れ
と申出で。活版をを活版で、甲乙も。増刷せば、學

新地

唐館の跡

出島より大浦を過る間を新地と唱ふ。新地ハ昔唐船の來る
 處に當て。場販^{ばはん}即ち相對の貿易を防ぐが爲め。奉行等の干涉
 して。其船載の貨物を悉皆納め置かしめたる。貨庫の有りし
 處にして。今ハ其儘居留地となりて。辯髮奴のはき溜々なり。
 唐館の在りし處ハ。新地の奥なる。丘と丘との谷合なり。昔ハ
 館内と稱して。二廓を成し。出口々々門を設けて。出入甚嚴
 重なりしが。今は支那寺が一つ二つ有る外。迹を遺さず。名
 も十善寺郷と改めたハ。立派なれど。實ハ貧乏もの。博奕連の
 住家にして。大概毎日の様は新聞は出される。厄介町。唐ビ
 ー。黒縮緬の名産地なり。ト曰ふても。扱ハ織物は精出すことよ
 々と。早合點ハし給ふ可からず。おか支那語よて。唐ビーと云

唐ビ

黒ち
めん

ふ笛ハ。元片田舎なる藪そだちのお竹どんを以て。こしらへ
 たる者にして。此笛。晝ハ。竈の火を吹き。味噌を摺る等よて。下
 女の能を爲す。夜ハ。支那人の手枕となり。月琴は合奏する時
 ハ。其音オカッ。チャン々々と鳴るより。極めて晝夜は重寶
 なるを以て。狡猾なる支那人。好んで之をおもちやとす云々。
 可愛樂誌氏の解釋なり。又黒縮緬と云ふハ。昔幕政瓦解の折。
 やむごとなき奥方令嬢。世の變は取つく島のなき餘り。減ら
 ぬ品の切賣を爲して。生計を求め給ふ。昔を忍びて。多く黒

試みよ之を崎陽の山川に問ふ。山川應へず。只瓊浦々上、幾船の笛、頻に活機を急を吹き、娥媚山頭、半輪の寒月、徒に遊子の骨を射る有る而已。

於崎陽客舍

井深仲卿謹草

十

長崎土産を讀んで天眼に寄す

書いたく。半死人のくせに、分外の事まで書いた。丸山がどうの、藝者がどうのと。大膽な筆法。偽天

眼也。但しを歌人坐して名所を知るの見識也。イヤハヤあざれる外無し。實を、あたらし男兒を俗才子に過去帳に載せもせぬかと。内々婆心も有るが。再思乃後意氣豁如。先づも、面白しくで止めて置く。「鐵弦ひく弓取、出ても、猛ぶ世に」。時節が時節、折角御用心々々々。

☆註一六……平野富二 本木昌造のあとを継いで活版印刷と活字製作を軌道に乗せた。築地活版の隆盛は平野富二の才覚による。また造船にも力を入れ平野造船所を作る。石川島造船所はその後裔である。

★図一……『東京日々新聞』第五四一号 使用活字は平野活版の五号。『東京日々新聞』は明治六年一月二四日第五四〇号から平野活版の活字に切り替えた。第五三九号まではウイリアム・ギャンブルの講習を受けた人々の一部が拠る勸工寮（後の大蔵省印刷局）の活字を使っていた。【二九・三〇頁参照】

が、たしかに正方形の中に入れていきます。上下方向はだいたい同じ大きさに近づいていますが、字形と左右幅は仮名固有の姿を色濃く残しています。水平垂直の格子構造で定型化が進んだ明朝体漢字の字形にくらべて、仮名は線幅が細くいかにも毛筆時代のスタイルを踏襲する不定型です。今の明朝体を見慣れた目には漢字にたいして仮名のスタイルが違っていてなんだか変だなと思うかもしれませんが、明治初年の人にはむしろ漢字のほうが気持ち悪かったのではないのでしょうか。

本木昌造のあとをついだ平野富二^{☆註一六}は明朝体漢字と仮名活字の改刻をおし進めていきます。のちに「築地体」と呼ばれ、日本の活字書体を牽引する書体の第一歩は、上海美華書館の漢字と図一〇で見たような日本の毛筆仮名を大きく逸脱しない仮名の組み合わせで始まりましたが、それとほぼ同時期にもっと正方形に近い字形の仮名も作られていました。^{★図二}池原香稚版下の仮名は二号・三号・四号ですが、もう一種の仮名は五号用です。この五号用の仮名と池原香稚仮名をくらべてみてください。字形の作り方は近いのですが、ずいぶんと正方への指向が見えますし、左右に振れる文字が少なくなり行の中でしっかりと直立していることがわかれると思います。しかしまだ定型化したという段階ではなく、試行錯誤の段階だと感じます。平野活版はやがてこの五号仮名も捨て去り、新しい五号仮名を使い始めます。これが府川充男氏が名付けた「築地体前期五号仮名」です。大日本スクリーン製造がリリースした「日本の活字書体名作精選」収録の一書体で、前回の文章のPDFは今回復刻したその「築地体前期五号仮名」で組んでいます。この仮名書体がいつ作られたのかは残念ながら私にはわかりませ

官許東京日々新聞

第五百四十一號

明治六年十一月二十五日晴
火曜日 寒暖計六十四度
潮時満 十時四十八分

公聞

文部省報告第二十二號

明治六年十一月十八日發行

第六大學區内中學區番號左ノ通

畫定ス

第六大學區内中學區々分表

縣名 中學區數 全番號順次

新瀉縣八中學區自第壹番至第八

番

新川縣五中學區自第九番至第十

三番

長野縣四中學區自第十四番至第

十七番

若松縣二中學區自第十八番至第

十九番

置賜縣一中學區第二十番

酒田縣一中學區第廿一番

相川縣一中學區第廿二番

計七縣二十二中學區

し三百年の基を立し地みて北方の
一大都會なり今の宮城縣衙門は元
養賢堂といふ學校なり近來あらた
母帥範學校を建築せり是を此地の
西洋形家作の元祖とせし又此節
陸軍の兵營を造立せらるゝて職工
ども多く入込み市中甚母ざやか也
其外小學校中教院病院も出來し道
路を修復し番人を廻らせ町々母は
燈籠を立て大ひ母街衢の面目を一
洗せり寫眞帥もあり唐物屋も多し
只惜しむ人心猶頑固母して舊習を
脱せず士族は情弱母して業を勉め
ず因循として光陰を空しうせり夫
奥羽の地は米穀多く蠶絲母富み魚
鹽の利あり銅鑛石炭山も少からず
唯その運送の不便利を苦しむのみ
他日我國富強の基を起さん者は
必奥羽母あらんもし大志ある者此
問母奮起せば策を施す事難からず
其責在職の君子母あり

横濱の事情を教示兩三日止宿致せ
せ則横濱へ赴けり太田町二丁目小
崎多平と云る旅店母一泊なせしが
其翌日同家母泊り合せし旅人はも
同國筑摩郡松本町伊勢屋清兵衛の
悴清助と云る者母て六七年前本國
母て逢し人なりしが不圖面會して
故郷の事杯語り合兼ての志願なり
し洋人の雇ひとなるべき順序を問
ひし母先自己の手代となり商法の
助をなせし差當り東京芝元町柏
屋利右衛門より受取へき爲換金貳
百五十圓あれば此證券を持參して
受取來れよ左をれば其中何程歟分
與をべしと封書一通を與たり三平
之を懷中し持合せの金子四圓七十
五錢を荷物の中へ入置其儘荷物を
清助母預け置神奈川より人力車母
乗り芝中を尋ねたれ共芝母元町と
云町名なく柏屋利右衛門と云る者
更母分らず車夫も尋ねあぐみ餘義

官許
東京
日々
新聞

第五百三十九號

明治六年十一月二十二日晴
土曜日 寒 驟計正午五十九度
汐時滿 八時二十四分

公聞

第三百九十一號

府
縣

囚人護送并府縣送ノ節護衛ノ者附
添ノ儀是迄區々相成居候ニ付左ノ
通規則相定候條右ニ準據ニ可取計
此旨相達候事

明治六年十一月十九日

右大臣岩倉具視

囚人護送規則

第一條

一府縣繼送ノ節尋常囚人ハ二人ニ
繩取一員重犯ハ一人ニ同一員附添
總テ犯人三人以上一時餽送ノ節ハ
爲取締等外吏又ハ邏卒番人一員附
添可申事

第二條

一 他管内謫送ノ節ハ繩取人員ハ前
條ニ准シ附添可申謫衛者ノ儀ハ囚
人三人ニ付一員ヲ定限トスベシ尤
三人未滿ニ候トモ一員附添取締可
致事

第三條

丞其他石田工部六等出仕伊藤記錄
助等尚隨行の判任數名何をも本年
中より歸府せらるべき趣に

伊豆の天城山の南北六里東西十三里の大山にてモミ、楓、ブナ、杉、サルスベリなど大木の良材、澤山生たる山なり。此頃右立木御拂下相成三万圓にて買受けるありと噂あり。買主は何人かあるけれども大なる利潤を得べし。○昔より日本の家作の間取りと高の凡何間と相定り居たる事故は通例材木屋の長材木は四五間七間もあるなり。直き木は二間物に切りて山より出さるなり。そのへ宮寺などの高大の建築は山へ別段注文して長き材を取りにたり。然るに近代文明開化は立致り西洋風の高堂重閣を町人までも作る事相成候故材木屋は山の方までも長材木を取る様

鹿島郡上幡木村農亡茂左衛門ヲ奪
取次たもリ罪案なり抑このたもな
る者ハ夫ある身マて去る明治四年
十一月十四日の夜斂て相かも非同
村農菅谷松藏と折しも主の留守を
幸ひ日頃の戀情を語合ひ遂に道な
りぬ契りを結び其後密會度かさな
り夫を捨て松藏と夫婦たらんと欲
したりしも今年二月の初茂左その
情況を察し二度まで嚴敷打擲し及
びくバ所詮この上ハ夫を無もの
し松藏と末長く同穴の契をせん
と遂に兩人申合せ其隙を伺ひ居た
り三月廿一日茂左ハ他出の途中に
埋伏して殺さんと計りしも其日の
事なり翌日のたも不快ゆえ茂左
をさしめ志崎村醫師新堀玄道方
で義取りを遣はしたる跡へ松藏來
ハ示し合せ松藏ハ一先歸宅し銃炮
玉藥等を携へ來りけむ共々立出
たもハ村内字向地井戸邊忍居松藏
ハ十間程進み日く茂左ハ歸宅を尋

★図一二……「築地体前期五号仮名」を使っている『東京日日新聞』明治十一年九月二日第二〇二四号、二段目にヘボンの辞書の編纂に協力した岸田吟香の名前が見える。この当時は東京日日新聞の記者。『三三三参照』

んが、府川充男氏の調査によれば、明治七（一八七四）年五月一四日第六八七号の『東京日々新聞』^{★図一二}に使われたのが最初ではないかということです。

『法普戦争誌畧』に使われた明治四年以降約四年間で三種類の仮名を作ったのは興味深いことです。はじめは毛筆仮名そのものでした。次に登場したのは毛筆仮名からすこしはなれて定型化を目指す字形をとりはじめたもの、そして明治七年に出現した「築地体前期五号仮名」^{★図一三}は、現在に続く明朝体仮名の方向を決定づけた書体ということができるのではないでしょうか。この五号仮名はこのうち部分的な改良がなされ、字形もわずかに変化しながら日本全国へ広がっていききました。いま詳しく見てみると、文字には大小がありすこし右上がりの造形に感じますが、傾きに統一性がないようです。しかし毛筆仮名の線の躍動感を生かしながら無理なく正方形にまとめている彫り師の腕は見事だと思います。明治二年に活字製法を初めて習い、わずか五年でここまでの姿形を作ることのできた彫り師はいったい誰であつたのでしょうか。残念ながら記録はなく無名の職人というほかありません。日本の活字書体は誰にも知られない無名の職人の努力によって支えられてきたのです。話がすこしそれましたね。

この前期五号仮名をいっそう洗練させたのが「築地体後期五号仮名」^{★図一四}です（この文章は覆刻した後期五号で組んであります）。多分明治三〇年代に作られたと思いますが、正確な完成年代と彫り師の名前はわかりません。毛筆仮名の自由さと定型化の微妙なバランスの上に立った姿形は、正方形の中へ無理なく配置され、自然な美しい線質とあいまって日本の活字書体の中でも優れた書体といっくいでしょう。この書体の影響は現在のデジタルフォントの中にも数多く

一外六人なり(被)今西とも七名の人／＼皆同様なるか。曰く同様なり(被)當時今西の何等の職を務めしか。曰く區長なり(被)それ相違なきか。曰く相違なし(被)被告、判事に向て曰く原告あてに瓦斯買入れの節今西相一が區長たりし旨を答辨仕れども元來瓦斯を高島嘉右衛門より引き受け人民の共有物と致したるの八年の六月卅日あして其頃今西相一の實神奈川縣の權大屬を奉職致し居りたることなれば原告の答辨に相違の據存せりゆゑ今一應原告へ御尋問預りたし(原)原告あてに相違なしと信ず故これあて豫審裁判の證據と成れを被告の原告の答ふる所を信じて可なりと思惟するなり(被)この事の後あして更らば質問すべし現今如何あしてあるか(原)今西相一のことか(被)否な現今誰れが瓦斯の事務を取り扱ふや。曰く島田豊寛外二名なり(被)それ相違なきを領せるや。曰く領せるとい知るとのことか又承諾せるとのことか(被)承諾の事なり(原)抑も此の豫審の裁判たるや既往あ起りたることの理非曲直を判斷せらるゝものあて現今の原告人どもが思想を插むべきあ非らず之れを要する原告の思想に決して豫審裁判の證據となるべきああらざれば被告代人あてに能く熟考ありて事實の質問あらんことを願ふ且つ原告あてに右等の質問あ答辨するの義務を帯びざるがもあこの答を拒むなり(被)只今争ふ處の人ああると職ああるのことあして此の事の起りたる前後共有物の所有主たる人民がその共有物の取り扱ひを委託し安心して居ると云ふことあ實あ

御巡幸の記

第一報八月卅日浦和發

岸田吟香報

板橋までの事の東京探訪人より報知したるべし却説板橋と御發轫あて一時二十五分板橋へ着せ玉ふ區務所あて御小休あり其間だ何も書き送るべき事と無し

板橋驛より志村の坂を下り玉ひて戸田の原あ至り玉ふあ夏草の繁みの間だふや、秋めきたる女郎花、萩、桔梗などの綻び始めたる大宮人たちの旅の御心を慰め奉るなるべし戸田の橋を渡り行けば秩父の山／＼榛名妙義なども雲間あ見えて景色殊あよし只殘暑の甚しき供奉の人／＼汗もふき敢へず見え玉ふ道の兩方の田畑あ粟、稗、早稻などの丁寧あ務ときて立ならび頭と垂れたる大君の御幸を拜み奉るなるべし旅の驛のとなりて拜見人あ至て少し是のみな浦和へ集りたるなるべしこの驛の入口あて元旅とか云ふ處あ町の兩側あ學校の生徒およそ八百人位も並びて拜禮したり恭しく見えたり

一時半あ旅の區務所と御立あらし御道中なも書く程の事なし拜見人あ村／＼より集り來りて道傍の人家また田畑の畦あ集り立禮またい立之だかりて禮なしあ拜見するも有り頭を地あ摺り付けて拜するもあり人家の入口あ薦を布き坐して拜見するもあり酒など飲みては通轡を待居たる体なりし

二時半あ浦和驛へ着あせ玉ふ尤も縣令白根君の板橋まで奉迎せられ夫より先導し奉らる明三十一日の縣廳へ臨御あられ夫より學校及び公園地あ設けたる管内勸業博

の圖を天覽あ備へ

郡三峯山の奥あて人民の極めて盡を披きて讀み上げて併せて其道路を略の管内なる武蔵年間幕府を開き見えぬ程の人物が通ふ程なる道の廳あて容易あ往來すちあ死するのみ衣ふ物と織りて着るたり食物の只稗を醬油も少なければなどを第一の美味冬の寒さを凌ぎ病きあもしろき見聞生と送るの我々兄不幸の人民あるをとを知らせず皇恩臣の不行届とやすあ交際の出来る様村あ往來の道路をなり聖上の此圖縣廳あ陳列たる

耿	駭	軍	先	又	新	陌
宕	舒	鍾	旨	替	梓	施
混	慶	語	支	眞	號	厝
謙	尾	敘	臻	塩	笑	屏
狠	威	義	微	麻	御	鐸
鈍	果	姥	咸	採	過	迄
魂	仙	等	覃	添	真	沒
隱	阮	寢	元	蒸	漾	月
黠	蟹	賄	江	肴	鑑	術
隔	布	燕	歌	敢	鹽	麥
巧	彌	寒	侵	換	絳	桓
旱	海	山	文	用	暮	恒
緩	巧	嚴	尤	闕	咍	錫
篠	皓	清	賈	宋	沁	帖
陶	馬	丸	鹽	澄	霰	緝
矮	諫	東	談	換	寢	葉
止	靜	蕭	刪	宥	咍	葉
衍	橙	幽	灰	勁	廢	乏
運	董	霽	青	夫	至	遇
業	產	梗	脂	末	梵	曷
冢	霽	陽	沁	陷	質	屋
范	阮	庚	陽	評	薛	物
滿	祭	庚	庚	淑	昔	沃
謙	緝	戈	登	奉	燭	覺
寢	感	哈	冬	敬	沒	合
賄	講	魚	耕	侯	末	勿
諫	紙	之	登	代	直	業
幹	厚	侯	虞	隊	狎	註
小	須	鍾	賄	箇	職	
咸	刪	佳	尤	效	治	

○各府縣續々文字

聚京郡六阪埜榑栗蓬鷲千葉繁長野晉出梨爲三重草讚輝摩石懸獨出影峯寒留青嵐最親岡廬山口

○平假名及び附屬物

いゝはにはへどちりぬるをわかよたれそつねならむうゐのれくやま
けふこゑてあさきゆめみしゑひもせすんばばへふひばへどちがだ
ぞづくげふでさぎじひせすこととすけりしはるる方々入人失失此
様計被衣上下いゝくく

○萬葉假名

以彼口之彼歸仁不又其得保不へる案重と重なる程に利慾窮る氣難く
我日如のり世と与ふ多量是體れ終るう律陸河の林赤眼野れ奇あふ
羅望露字井通體れ乃於お在久々迄居中万海若きぬ劣大ぬえ下ふく
海法を李委推也申記免及之去一移氣分飛を毛如毛勢走須を不バを不
どふのぶ然ふ必おる去ト也

○片假名及び附屬物

● 右漢字種類豫數 九千五百餘文字

尙ホ目下追正中ニ御座候得バ追々目錄へ増加可仕候間此段御承知之程奉願候也

○平假名及び附屬物

いろはにほへどちりぬるをわかよたれそつねならむうゑのたぐやま
けふこねてあさきゆめみしゑひもせすんがぎぐげござじすせぞだち
づでござびぶべぼびぶべほととちのけふねるべも入人あま
を様針被糸よ下ゝとととゝゝゝくくくみみみりりりも

○萬葉假名

以後ハ之鑄波仁ハ又亦通得保不ハ層重ト重吾理里利李熟劣留取難
 上在哉且和あり案と与ハ敵重能礼機若う健陸川ハ蘇赤取野ルある
 小長羅聖露字井通統此乃於お久々存中万悔々若きぬ亦ハ敵元ト當く
 案阿はさ乾我控也申免美ミミハ志勢東分死些屯如毛を勢屯以在不バ
 を不どが可ぶ死不ハおを志トじ屯

○片假名及び附屬物

イロハニホヘトチリスルヲワカヨタレソツネ子ナラムウキ井ノオク
ヤマケフコエテアサキユメミシエヒモセスンノ片尻ノ々ガギグゲ
ゴザジズセゾダヂヅデドバビブペボバビブペボ、ハ、ハ、ウ、ハ、ハ、シ、己
リ、ス、ツ、ヅ、ハ、云、寸

○二分ノ一平型

☆註一七……築地体三号細仮名 日本人が受け入れやすい毛筆仮名の伝統を取り入れて活字化した書体。文字固有の大きさを残して、流れるような運筆は今見ても美しく、現在のタイプデザイナーには作れない字形である。一号、二号もこの字形の仮名を持つ。

☆註一八……築地体初号仮名 明治二〇年代には完成していたと思われる金属活字最大のサイズの仮名書体。字形の整理と、曲線の緊張感と、これ以降出現した大型の金属活字・写植書体・デジタルフォントのどの特明朝体もこの書体を凌駕できない。堂々たる存在感を持つ優秀書体。

☆註一九……築地体三十五ポイント仮名 三十五ポイントは新聞活字の五・五倍。本来の大きさは三六ポイントで、それを一ポイント小さい活字表面に鑄込んだもの。字形は流麗、触れればはじけるような曲線の緊張感はすばらしい。

☆註二〇……築地体三号太仮名 三十五ポイント仮名と同じ彫り師か、あるいはその直系の弟子によるものか。書体の性質は近く、三十五ポイントよりも抑制がきいた字形にまとまっている。この太仮名は三号ゴシック体と混植することも可能である。

☆註二一……築地体一号太仮名 一号に組み合わせる正規の仮名は三号細仮名と同じ字形の書体である。アンチック体に近い使われ方を目指したのか。手書きに振れた字形で、文字固有の形を残し脈絡も生かしており、正方形を意識する築地活版の大型活字のなかでも個性的である。

参考文献・関連書籍

- 『本木昌造平野富二詳伝』三谷幸吉著、詳伝頒布刊行会、一九九三年
- 『本邦活版開拓者の苦心』津田伊三郎編集、津田三省堂、一九九四年、株式会社ナブス、一九九七年復刻
- 『先駆者岸田吟香』杉山栄著、岸田吟香顕彰刊行会、一九五二年
- 人物叢書『ヘボン』高谷道明著、吉川弘文館、一九八六年新装版
- ヴィネット03『和様ひらかな活字』板倉雅宣著、明文堂、二〇〇二年
- ヴィネット08『富二奔る——近代日本を創ったひと。平野富二片塩二朗著、明文堂、二〇〇二年
- 『日本の近代活字 本木昌造とその周辺』近代印刷活字文化保存会、二〇〇三年

見られますが、その中でも写研の写植書体石井明朝体 MM-A-OKI/OKS が代表的なものと言えるでしょう。

築地活版の仮名書体は三系統に分けることができます。ひとつは毛筆書の伝統を受け継いだ字形を色濃く残した「築地体三号細仮名」^{☆註一七}に見られる流麗な書体と、ひとつは手書きから離れて字形を整理しつつ正方形化に向かうもの、この代表が「築地体初号仮名」^{☆註一八}「築地体三十五ポイント仮名」^{☆註一九}「築地体三号太仮名」^{☆註二〇}です。そしてこの両者の中間タイプが「築地体一号太仮名」^{☆註二一}で、手書きに若干振れた字形です。「前期五号」「後期五号」はこの中間タイプに属するものです（^{サイトをの書体見本}ををご覧ください）。見出し用書体はあくまで正方形への定型化をいっそう進めたもの、本文用書体は毛筆手書きの味を残したものとという設定は今でも興味深いものです。

仮名の毛筆手書きから活字への移行は、それぞれの文字が持つ固有の形・大きさを正方形のなかに押し込め、大きさを揃える方向で字形に手を加えるという作業でした。その作業は、大胆なアイデアと細心のデザイン処理能力を持った無名の職人が、印刷適性をみすえた合理的な字形を生み出す苦闘の歴史といっているのではないのでしょうか。

私達はその成果を今享受しているのです。

◎組版仕様

書体＝ヒラギノ明朝 Pro W3（漢字・欧文・アラビア数字）＋築地体後期五号仮名（仮名・約物、「日本の活字書体名作精選」より）

見出し＝サイズ：60 級／本文＝サイズ：16 級、字送り：20 點、行送り：30 點、1 行：36 字詰め・22 行

頭註＝サイズ：10 級、字送り：10 點、行送り：13 點、1 行：21 字詰め・50 行

◎発行＝大日本スクリーン製造株式会社 ◎デザイン・組版＝向井裕一（grypn）

（2005.03.18）